

村上春樹の

ペーパーバック・ライフ

第2回

Setting Free the Bear
— John Irving



一昔前まではウィーンといえば「第三の男」というのが通り相場だったが、昨今はそれにジョン・アーヴィングが加わってしまいいきな勢いである。アーヴィングのファンなら御存知のように、アーヴィングの小説には必ずと言っていいくらいウィーンの街が登場してくる。「熊の解放」は終始オーストリアが舞台だし、「二五八ポンド

熊は解放されたのだらうか？

の結婚」にはそれこそ「第三の男」風の戦後ウィーンの話が出てくるし、「ガープの世界」はもちろんベンション・グリルバールツァー、「ホテル・ニュー・ハンブッシュ」も後半はモロにウィーンものである。これくらいいつこく外国のひとつの町を舞台に小説を書きつづける作家も珍しい。

だからというわけでもないのだが、先日四、五日ばかりウィーンに行ってきた。とくにウィーンと行って行ったのではなく、仕事で一ヵ月ほどドイツにいたついでにウィーンに寄ってみたのである。ニュールンベルグ近郊からDB（ドイツ国鉄）のインタシティー特急に乗って四時間ばかりでウィーンの西駅に到着する。駅のホテル・インフォメーションに行って「ヒーツィンク動物園の近くのホテルを取ってほしい」というと、係の太ったおばさんが僕のバックパッキングをチラッと見て「ヒーツィンクには一級ホテルしかないけどそれで良いか？」と訊く。一級と言っても二人で朝食がついて一万二千円くらいだからとくに高

いというわけでもない。それにヒーツィンク動物園といえば「熊の解放」の重要な舞台となった場所だから、ウィーンに来てこの近くに泊らないという手はない。

西駅からSバーンに乗って二駅、Uバーンに乗りかえて二駅行くとヒーツィンク駅がある。タクシーで行くと市の中心からは千円ちょっとくらいかかる。「熊の解放」のストーリーのつとるとラートハウスからシェーンブリュナー通りをとおってヒーツィンクに達するわけだ。

ヒーツィンク動物園の入口は駅のすぐ前にあり、その入口の道路を隔てた向い側に我々の泊るホテルの入口がある。ロケーションとしては絶好である。朝早く起きてウィーン風の朝食（つまりパンとコーヒーだけの朝食）をとり、そのあとシェーンブリュン公園の中を散歩する。シェーンブリュンの中心には有名なシェーンブリュン宮殿とファザン・ガルテンがあり、その西側を動物園とティロル・ガルテンとヒーツィンク墓地が占めている。ウィーンに来る観光

客は普通宮殿とグロリエッテを見物してシーンプリユンはおしまいということになるが、本当に面白いのはこの西側の一帯で、早朝ティロル・ガルテンの林を歩いてリスに餌をやり（リスがいっぱいいて、体にはいのぼってきて餌を食べる）、動物園を見物し、しんとした墓地を散策し、昼はモンテクコリ・ブラッツの角にあるひっそりとしたホテルのレストランでビールを飲み、ウィンナ・シュニツェルを食べるというのがこのあたりで一日を過すベストコースであると僕は思う。とてもウィーンらしくて良いところです。

もつとも僕がヒーツィンクに行ったのは十一月で、ウィーンの十一月は日本の真冬だから、もう動物園のベスト・シーズンは終わっている。寒さに弱い動物は建物の中にひっこんでいるし、熊なんかはぐっすり眠りこんだままびくりとも動かない。見物客なんてほとんどいない。老人バスを持ったおばあさんが重そうなコートを着て、無感動にキリンを眺めているくらいのものである。とにかく寒い。動物園の中心にある洒落たカフェ・レストランも扉をびたりと閉ざしたままだ。「熊の解放」の季節は春の

盛りだから、季節としてはまったく逆ということになってしまふ。

僕は「熊の解放」のペーバーバックをポケットにつっこんで時折バラバラとページをくりながら動物園をひととおりまわって見たのだが、やはり年月の経過はいかんともしがたく、動物園の状況は「熊」当時とはがらりと変わってしまったようだった。まずいちばん肝心の熊——アジア・クログマ——がいないのである。これがないことにはせっかくヒーツィンク動物園までやってきたかいたくないではないか、とさうざん搜しまわったのだけど、やはりない。本の中では宮殿の廃墟を利用したコンドルの檻のすぐとなり三方を壁にはさまれた熊の檻があることになっているのだが、現在ここには檻はなく、べろんとした野牛の柵があるだけだ。まさか動物園関係者がアーヴィングの小説を読んで「熊の解放」を怖れたわけでもあるまいが、熊セクションは今のところずっと奥の方に移されている。ここには九種類の熊がいる。しかし、アジア・クログマの姿はない。

ヒーツィンクはアーヴィングも書いていたように古いシェーンブルン宮殿の一部

を使って作られたものでそのぶん老朽化はげしく、どんどん改修されており、今はもう昔日の面影はない。「熊」に出てくる夜行動物館（アクリイが観客の指を長い舌でペロリとなめる）もなく、巨大な一物ぶらさげたレイヨウの姿もなく、動物の殆んどはもう代がわりしている。主人公グラフとジギーが女の子たちといちゃつきあつたティロル・ガルテンのシダの繁みもなく、動物園からティロル・ガルテンに通じる小径も門で閉ざされている。ジギーが動物園内で夜を過すべく身を隠した植込みもない。コンドルだけが唯一小説中の情景どおりにハプスブルグ家の廃墟にどっかりと腰を据えている。しかしとにかくまあ、これがかのヒーツィンク動物園である。

反対側の出口から出て、絶壁みたいに刈りこまれた並木の道をしばらく歩くと、丘の上からウィーンの街がざっと見渡せる。小説の舞台を訪れるのもなんだか変なものだなど思いつつも、翌日はいよいよグリルバルツァー・シュトラッセにあるペンションへと移るのである。

そのへんは次回。